

書評 上田邦義著『ブライズ先生、ありがとう』（三五館）

“Thank you, Professor Blyth”

郡山 直

KOORIYAMA Naoshi

Buraizu Sensei, Arigatou (“Thank you, Professor Blyth”) is a book about R.H. Blyth, a great English scholar of Japanese haiku, senryu and zen by one of his devoted former students, Kuniyoshi Ueda. R.H. Blyth came to Japan in 1940 to teach at the 4th Higher School in Kanazawa. With the outbreak of the war against the U.S.A. and Britain, he was interned in the facility for enemy civilians in Kobe in 1942. In the very year, he had his book, *Zen in English Literature and Oriental Classics*, published by Hokuseido Press in Kanda, Tokyo. Then he had his famous work, *HAIKU* in 4 volumes published also by Hokuseido Press in 1949-52. He then successively published *Senryu: Japanese Satirical Verses; Oriental Humour; Zen and Zen Classics; Japanese Life and Character in Senryu; Edo Satirical Verse Anthologies*, and *History of Haiku* from 1957 to 1964. All the global interest in haiku all over the world today owes to these books by R.H. Blyth. Many literary people all over the world write haiku in their native languages. No other writer or scholar has ever done so much as R.H. Blyth in promoting interest in haiku, senryu, zen and Japanese character. Superb translations by R.H. Blyth of some famous Japanese haiku and senryu are quoted in this book. We can see many an admirable model of translation of haiku by Blyth which shows us not only the delicacy and beauty, but also the power, of haiku. Kuniyoshi Ueda mentions that Blyth was well versed in world literature and art, Shakespeare, Bach, Thoreau, and other famous writers. He enthusiastically expresses his deep gratitude to his great mentor, R.H. Blyth for all his influence. Moreover, this is a book about world peace. And it should also be mentioned that the author of this book has performed some scenes from Shakespeare in the noh-style on the stage for some English-speaking audience, which is a marvelous attempt.

Some keywords: “Influence of a great mentor,” “the beauty and energy of poetry,” “the importance of world peace,” “the importance of haiku,” “the greatest nature poet in the world, Basho.”

この本を読んで、先ず私が著者に言いたいことは『上田邦義さん、ありがとう』ということだ。禅、俳句、川柳の研究と著作を通じて日本人の精神と生き方を全世界に紹介した偉大な英国人、R.H.ブライズについて、この感動的な本を書ってくれた著者に心から感謝したい。

著者上田（宗片）邦義が R.H.ブライズの人柄、学識、哲学、情熱、世界観、などなど、あらゆる点にほれ込んで、師から受けた深い、深い影響を熱っぽく書いてあるのがこの本だ。

私は書評を書くとき、ぐだぐだ余計なことを述べるより、対象の本の重要部分を、列記することのほうが、その本の真価を正確に示すことが出来るのだ、と思ったことがある。従って、この文章を記すにあたっては、この本の重要な箇所を列記することにしたい。そのほうが、この感動的な著作の真価を明確に提示することが出来るし、そのほうが私にとって楽でもあるからだ。

個人的な話になるが、実は私はいま『今昔物語』の英訳という企画を抱えていて、とても忙しくて、書評らしい文章を書く余裕がないので、私が特に深い感動を覚えた箇所を列記してこの快著を紹介したい。私の書く文章より、著者のなまの声のほうが、この本の真価を表してくれると思うからだ。

昭和一五年に金沢第四高等学校（現金沢大学）へ移ったブライズは、^{なかかけはら}中欠原の洋館に住んだが、一六年の十二月八日に太平洋戦争が勃発し、即日、金沢警察署の建物内に抑留された。そして翌年三月、神戸の交戦国民間人抑留所に収容され、その後郊外の山中の収容所に移された。京城で再婚した富子夫人と離れて収容所で約三年半を過ごすことになる。

この山中の収容所というのは、六甲山の布引滝に誓い^{ふたたび}再度公園にあって、元感化院だった建物である。私は二〇〇四年にその場所を見に行った。途中まではタクシーで行けたが、「もう車は通れません。あとは歩いてください。行っても今はありませんよ」と言われ、夕方にもなり、山道を登るのを諦めたのだった。

ブライズはそこで日本文化の研究に没頭し、『禅と英文学』を脱稿、太平洋戦争中の昭和十七年十二月に、敵国日本において、しかも英語教育反対が叫ばれる中で、東京神田錦町（当時）の北星堂書店から出版したのだ。本を出版した北星堂書店にしてみれば、「戦時中で、敵国人になりましたが、約束は約束ですから」ということであつたろう、と次代の社主中土順平氏が私に語ってくれた。（四三頁）

ブライズは、「科学は人間（性）の敵」とまで言っていた。科学の進歩が人間性を蹂躪し、やがて人類の破滅を招くことを恐れていたのだ。そして人々がそれに気づかないことをもどかしく思っていた。（筆者注 原爆、原発事故をすでに予感していたのか）（五六頁）

先生の六十五年十カ月の生涯は長いものではなかった。師と仰いだ大拙の九五年に比べれば、あまりにも短かった。しかし、シェイクスピアの五十二年、ラムの五十九年に比べれば、短いとはいえない。その充実した生き方と達成した業績からは、思い残すことのない理想的な人生

だったのではないか。

ブライズは、日頃は句作をしなかった。日本語の俳句は二句しか知られていない。
一句はまだ二十代の京城時代の句で、

葉隠れに 青い夢見るかたつむり

ブライズ自身のことである。もう一句、晩年の入院直前の句が、辞世の句ということになる。
さざんか
山茶花に 心残して 旅出かな (五八―五九頁)

今思い出してみても、小学生、中学生のころ、私は生きるのが嫌で嫌でたまらなかった。なぜこんな醜い世の中に生きてゆかねばならないのだと思っていた。しかし死ねば母が悲しむであろうことを思うと、それはできなかった。

叔父が交換船でパナマから帰ってきた。そして日本兵になった。

終戦になると叔父は通訳になって、アメリカ兵をわが家に連れてきたりした。私は英語がわからず黙っていて、米兵に軽く頭を叩かれたことがあった。それ以後私は猛然と英語を勉強した。中一の夏のことだ。仲間と英語部をつくり、教科書は二種類覚えようとした。

(七四頁)

イエスの「求めよ、さらば与えられん。叩けよ、さらば開かれん」とはいかなる意味か。この言葉を理解するのに、ブライズ先生は、「叩け」とは、にぎりこぶしでドアをノックするようなものではない。コンクリートの壁に頭ごとぶつかってゆくことなのだ。それでなければ真理の扉は開かない、と解釈していた。

「人生の意味は何だろう、などと考えている間は、人生に意味はない」という。

当時の私は先生のあまりの真摯さと激しさに圧倒され、しばしばひとり泣いた。先生は講義中、「私は泣き虫(crybaby)で、毎日何度も泣く」と話されたことがあった。悲しいから泣くのではなく、美しいもの、はかないものを見たとき泣くのだと言っていた。

(七八頁)

ソローの文章はそれ自体が散文詩のようである。代表作『ウォールデン(森の生活)』(*Walden, or Life in the Woods*)の簡潔でリズムカルな文章を音読してみれば、それはわかる。じつに気持ちよく読める。韻律のある詩を読むときと、ほとんど同じ感じで音読できる。わが国の『方丈記』や『奥の細道』に似た文章である。

ブライズ先生は『やさしい詩』(*Easy Poems*) 第一巻の「はじめに」に、こう書いている。「詩は人生に欠くことができない。詩のある生活こそ人生である」(*Poetry is indispensable to life. Poetical life is life.*)

「詩の授業は、それが英語であれ日本語であれ、学校の授業の中でいちばん大事なものである」

(八一頁)

当時から関心のあったシャイクスピアの英語の原文に謡曲の節付けをして、「英語シェイクスピア能」なるものを創作し、これを自ら謡い、自ら上演するという無謀な企てをやってみようと思ったのである。（八四頁）

高校三年まで国の重要無形民俗文化財である山形県の「黒川能」の近くに住んでいながら、意識して観ることのなかった能を、大学院の頃からはよく観に行った。禅の境地の演劇表現とも思われたからである。そう思うと、シェイクスピアのあの最高の英詩の原文に、謡曲の節付けをほどこして上演してみたいと思うようになった。世界中の人々にも能のあの境地がわかってもらえるのではないかと。そう思うと私は矢も盾もたまずに、友人や能楽師の下で、謡や仕舞などの実技を習い始めたのである。（八五頁）

ブライズ先生が理想とした生き方は、芭蕉のそれであり、またソローのそれであった。両者とも詩人であって、自然とともに生きた。そしてどちらも詩人あるいは作家として優れた作品を書くこと以上に、優れた生き方をすることを、より大事なことを考えて一生を生きた。（一六六頁）

誠実だけでは、ただ真実の愛というだけでは、ユーモアなしには、この世は生きてゆけないのだよ。ハムレットとオフィーリアも、オセローとデズデモーナも。リア王とコーデリアも。彼らの悲劇は、いずれも、ユーモアが欠けていたのだよ。先生はシェイクスピアを通して、そういうことを教えたかったのであろうか。（一六九頁）

「人民のための政治」を実現するためには、まず殺し合いをやめさせなければならない。それが政治の責任というものだ。人民と人民の殺し合いをやめさせることこそ政治の責任であり、「人民のための政治」なのだ。戦争を始めてはいけない。戦争は断じて避けなければならない。戦争は人民同士の殺し合いだからだ。戦争で悪者を退治しよう、戦争で戦争をなくそうなんてペテンにだまされてはならない。（一九二頁）

私は研究者としてではなく、ブライズ先生を敬愛する教え子の一人として、本書を書いている。私は先生のことを、研究対象として考えたことはない。しかしこれからさらに多くの人に、研究対象として大いに研究していただきたいと思う（そのための参考資料などを巻末に掲げておく）。あるいはこの小著が契機となって、先生を知りより多くの人が先生のことをお書きになるなら望外の喜びである。

今後ブライズ先生について、さまざまな研究が出てくれば、レジナルド・ホレス・ブライズがいかに偉大な人物であったか、明白になるであろう。（一九五―一六頁）

イギリスのロンドン郊外に、鉄道員の一人息子として育った一英国人が、高校卒業直後、良心に基づいて兵役を拒み、第一次世界大戦の間、刑務所で肉体労働に従事した。そしてなによりも、「緑の野原の緑の草」(green grass in the green field)を愛するがゆえに、日本統治下の朝鮮に二十五歳で英語教師として赴任し、願いかなって昭和十五年ついに到達した日本では、帰化を申請しながらも、たちまち太平洋戦争が勃発して、神戸の交戦国民間人抑留所に監禁され、昭和十七年から二十年までの四年間、そこで禅と俳句の研究に没頭した。その間、昭和十七年にはなんと敵国日本で、「禅は世界最強の力である」で始まる「禅と英文学」なる英文著書を出版し、世人を驚かせた。それがブライズ青年である。

そして戦後まもなく、たて続けに『俳句』全四巻本を英文で出版し、日本文化と日本人への熱烈な愛を表明して、その価値を世界中に知らしめたのである。(一九八―九頁)

人類は自然に調和し、大自然とともに生きる。大自然のいのちを生きる。それがブライズ先生の俳句道(“the Way of Haiku”)であつたようだ。そして平和への道でもあつた。その俳句道は、いまや世界に広まりつつある・・・。

私事ではあるが、先年、アジア演劇研究国際会議でヴェトナムを訪問したとき、ハノイの東岸のハロン湾を案内され、その島や岩のあまりの美しさに思わず落涙した。ヴェトナム戦争の時に、何十万人の人がここで血を流したと聞かされたからである。

この湾は、中国の桂林と日本の松島の美しさをあわせたような景観である。私はこの感動をなんとかヴェトナム人たちに伝えたいと思い、拙い英語の俳句を詠んだ。そしてそれを案内してくれたヴェトナム人に渡したのだった。

まもなくヴェトナムから送られてきた封書に、ホーチミン市で出ている新聞の切り抜きが入っていた。ヴェトナム語のその記事は、私には読めなかったが、確かにその中に、わたしの英語の俳句が入っていた。

それは、日本語の逐語訳を添えて紹介すれば、次のようなものだ。

As long as you love
These rocks and isles of Ha Long Bay,
Vietnam is eternal.

(ハロン湾のこれらの岩や小島をあなたが愛するかぎり、ヴェトナムは永遠である)

(筆者注 これは実に美しい英語ハイクである) (二〇〇―一頁)

先生は「日本人がもっと俳句や川柳を愛していたならば、あんな馬鹿な戦争は起こさなかっただろうに」と惜しんだ。そして六五年の生涯を、激しく、懸命に、走り続けた。運命に流されず、自らの意思で、思いどおりに。(二〇四頁)

将来、人類の歴史は、ブライズ先生を、二十世紀最大の禅者(ZEN MAN)と評価するのではないかと私は思う。そして、二十世紀のもっとも偉大な人物の一人である、と。そして“世界の3B”として、「バッハ、芭蕉、ブライズ」を称えるのではないだろうか。その芸術を、そしてその人生を。(筆者注 師に対する著者のほとばしる情熱が魅力的。)

世界には、軍隊を持たない国と地域がすでに三十近く存在する。そしてオバマ大統領は核廃絶を目指すと宣言した。しかし廃絶までは、抑止力としてこれを維持するという、現実的な工夫もその後打ち出した。それが二〇一〇年の世界の現状である(今この「あとがき」を書いているところに、すばらしいニュースが飛び込んできた。オバマ大統領が、「核兵器を持たない国に対しては、核攻撃をしない」と発表した)。

何をを目指すのか、目標である。その目標を高く掲げ、声を大にしてくり返し世界にアピールする。そして行動し、世界をリードする。そんな政治家が、わが国にも早く現れてほしいものだ。

日本は絶対平和を目指す非戦国である、と。世界中の国々よ、日本とともに戦争のない絶対平和の世界をつくろうではないか、と。この提案が国連で支持され、決議され、実行に移されるのも夢ではないはずだ。(二〇八―九頁)

(筆者注 上田邦義の平和主義はわが国の護憲団体の思想と全く一致するものだ)

日本人と日本文化を愛し、日本に帰化することを願いながらも叶わず、英国人として亡くなった先生に、私は一日本人として、あらためて心からの御礼を申し上げたい。(二一〇頁)

以上が上田邦義の快著のなかから私が特に感動を覚えた文章だ。偉大な人間、R.H.ブライズ先生に対する敬愛の精神の溢れるこの著作で私を感動させてくれた著者に『上田邦義さん、ありがとう』と言ってこの文章を終わりたい。

2012年5月1日

郡山 直

相模原市「さがみ九条の会」会員